

11. 言語・伝承

11-2. 伝承作品

11-2-2. 伝説

「ピラカの人を大津波から救った黒キツネの伝説」

平賀の人達は、昔、浜近くにあったトニカ tonika というコタンに住んでいた。親から聞いた話だが、大昔、大津波があつた。ある日、水平線が真っ赤に見えた。古老の話では、こういう時は大津波の前兆だという話だ。もし本当のオレプンペ orepunpe (大津波) ならどうしよう。この辺には高いところがないのだから、早く逃げようと大声で叫んだ。柏の木の高台(トニカ tonika) めざして逃げた。走りながら後ろを振り向くと赤い水平線が空につくように盛り上がり、空一面に迫ってきました。その時に一匹の黒いキツネが現れて津波の先を吠えながら走りました。不思議なことに一方は門別方面に一方は沙流川方面にと二つに分かれて周りを埋め尽くして上り、皆助かりました。オレプンペが許してくれたのか、黒いキツネが助けてくれたのか、全員助かりました。それで黒いキツネの神の住んでいる安全な所にコタンをつくることにしました。今の鉄道の堀割の周り、岬の出っ鼻に住んでいた人は相当の人が波の引き際にさらわれて行ったそう。たぐさんの死人が出たその場所をアイヌは今はイオマチシ iomacis (悲しみの岬) と呼んでいる。生き残った者は、ピタルパコタン pitarpa kotan (現在の緑町) にコタンを作りました。トニカコタンの跡を昭和58年に発掘したところにたぐさんの人が住んだ跡があつたそうです。それから平賀コタン piraka kotan に移った。ピタルパコタンに残った人は平野という姓になった(貫気別編11-2-8参照)。

[門別 鍋沢強巳氏]

「サルパのフーリの伝説」

昔、フーリ hūri という大きな鳥の雄がサルパ sarpa の向かい(対岸、シウンコツよりも上だ)にいた。フーリの雌がピタルパのサントヌプリ santonupuri (谷崎製材の裏、チップ工場の岬)にいた。ある時、そのピタルパの雌のワシが堤防でノマメ(アハ aha)をおこしていたの女を子供を背負ったままさらった。サルパの雄のワシがさらったという嫌疑をかけられ、ピタルパの人からチャランケ caranke (談判)された。おまえのところでノミ nomi しているワシがメノコ menoko (女)をさらったということらしい。もし、応える気がなかったら、皆でトパットウミ topattumi (急襲)してやるぞと言われたので、困っていた。

サルパの首長(カユシピンナ kayuspinna)が賠償をしようと言ったが、ピタルパの首長は話

合いに応じなかった。雌が悪いことをしたのに雄のワシを殺せという。サントー山の雌を退治しなければ承知しないということになった。また同じ様なことが起きたら困るという。それも道理だと思い、サルパの首長が雌を退治しに出かけることになった。首長は一人で行くと言ったが、村人は、若い者を連れて行けと言った。村で祈っているものを退治するのは畏れ多いから、自分一人なら死んでもいいから、一人で行くと言った。

その時、オナタツテレケ optatterke (戦いの時に槍を持った6人の頭の上を飛んだのでその名がついた) という十勝から来た屈強な若者が一緒に行くと言った。二人は、ピタルパの首長からシカの皮40枚と槍2本、刀2本と若い者一人を借りてサントーヌプリに行った。二人がフーリのいる穴に着いた頃を見計らって、このシカ皮を上から落とすようにと若者に言って降りて行った。二人がワシのいる穴の横に降りた立ったところ、上からシカの皮が降りてきた。フーリは、穴から出てきて、そのシカ皮の上に羽を広げて降り立とうとした時、二人は両側から槍で突き刀で羽を切り落としてフーリを殺した(十勝の若者がなぜそこにいたのかは聞いていない)。

[門別 鍋沢強巳氏]

11-3. 言語資料

11-3-1. 発音

また、男でも女でも、祈りの文句を大きな声で言うものではないという。開けっ放しで祈ってはいけない。ただし、シンヌラナパ sinnurapappa (葬儀)の時のイヨイタクコテ iyoytakkote (引導わたし)の時は大きな声でやる。その他の時は声を出さない、エピヌピヌ epinupinu (小さな声で祈りの文句を言う)してやる。

[門別 鍋沢強巳氏]

つぎのような長い名前をつけた殿様の話 (日本語かアイヌ語かわからない)

オレットコ オレットコ ヘツチキ ヘツチキ
カムイノノ クチリ クチリ タランバコ ナンダノ
クラマテ シンノキ シンノ チツチョコビョー
シノチョコビョー ポントノ (強巳氏)

オレットコ オレットコ ヘツチキ ヘツチキ
カムイノノ カムイノノ クチリ タランバコ ナンダノ
ウラマテ シンノキ シンノ チツチョコビョー
シノチョコビョウ セコロ ハーノ テヘ アン (セコロ ハウエ アン) (ハマ氏)

って、その殿様が、子供のポントノ pon tono が井戸 (シムプイ simpuy) の中に入っ

て死ぬところだからといって、3軒も4軒も梯子を借りに行く度にその名前を言って、梯子を持って帰って来るともう死んでしまっていたから、長い名前をつけるなという話だ（佐伯ハマ氏がおばあさんから聞いた話）。このような話は、ウパシクマ upaskuma（伝説）というのかな。

[門別 鍋沢強巳氏]